

カリフォルニア滞在記（一）

—渡米前後に起こったこと—

岩立京子

日本という社会のなかでそれなりに適応している家族が海外へ移住するとき、どんな変化が起こるのでしょうか。新天地での自由と解放感に満ちた日々、楽しく快適な生活がスタートすると思いませんか。実は私もそう思っていたのですが、渡米直後は、一步間違えれば大変なことになる綱渡りのような生活が待っていたのです。

渡米前の家族の変化

ここでは、小学生と高校生の子育て中の家族が海外に移住するときに起こった変化とその後について、一人の母親、そして大学教員である私の視点を通してご報告していきたいと思います。

私たち夫婦が日々の会話のなかでほんの軽い気持ち

ちでサバティカルの話をし始めたのは渡米の数年前、そして手続きを含めて具体的な計画を考え始めたのが一年前でした。思い返せば、その頃より家族が少しずつ変化し始めていたようです。家族のそれが、これから起ころうとする一大変化について考え、「今の生活」を中断し、見知らぬ場所に行くことの不安や楽しみ、そして、そこで適応するための方法などについて日々の会話のなかで触れるようになりました。仕事の処理、住居その他の生活の中断手続き、病気の治療の継続、年老いた親の介護の引き継ぎ、そして子どもたちの転校など、当たり前に進行していた内容一つひとつに区切りをつける方法や、見知らぬ国での生活や学校のことを探んやりと思い描くようになったのです。最初に私が遭遇した問題が、一人の子どもが「どうしてもアメリカに行かなくちゃいけないの？ 行きたくない」と言い出し、特に高一の息子が悩みに悩んだ末に日本に残ると決意したことでした。私は家族で一緒に行くこ

とに意義があると思っていましたが、「勉強が一年ぐらい遅れたっていいじゃない」という私の軽い考えは、日本のシステムのなかでまじめ（？）に生きている高校生には通用しませんでした。結果的に今回渡米によって家族が離ればなれに暮らすことになったのです。

出発の一ヶ月前からは、私や夫は仕事の残務整理に奔走し、娘はこみあげてくる不安に自分なりに対処しきれず機嫌の悪い日が多くなり、息子は口数が少なくなつたかと思うと、急に「家族つてやっぱりいいな」などとつぶやいたりして、家族が揺れ動くようになりました。

時が矢のように過ぎ、いよいよサンフランシスコへと発つ当日。空港で家族全員で食事をした後、私たちが搭乗口に入るときがきました。「じゃあ、春ちゃん（息子の呼び名）、行つてくるよ。元気でね」と息子と両手で握手をしたときです。息子が目を赤くして、口を真一文字に結び、こみ上げる複雑な感

情をこらえているのがひしひしと伝わってきました。

た。私は元来涙もろく、特に子どもの涙には弱いので、悲しい別れにならないように思いつきりの笑顔で「じゃあね、アメリカへ遊びにおいでねー」と言いいながら手を振り、さつと背を向けて搭乗口に入りました。搭乗口を抜けながら、「こんなときに泣くなよー、たったの半年じゃない！」と心の中で息子を責めながら、一方で「こんな計画をたててよかつたのだろうか、息子にだけ不自由な思いをさせていいのだろうか」と自責の念にかられました。離陸の瞬間に感じるはずだった雑務からの解放感は、息子の涙のおかげで吹き飛んでしまいました。

サンフランシスコ統一学区(SFUSD)と 小学校入学手続き

私たちがサンフランシスコ国際空港に着いたのは八月二十二日の午前九時三十分。気温十四度、手荷物を受け取り、空港の外へ出たときには肌寒さを感じ

じ、鳥肌が立つほどでした。

さあ、いよいよサンフランシスコでの生活の始まりです。数日のうちにアパートの入居手続き、家具のレンタル、電話の契約、それに並行して娘の入学手続きなどを済ませ、何とか新学期開始に間に合わせなければなりません。

翌日、ホテルから入居予定のアパートの事務所に直行し、賃貸契約をすることにしました。まずは寝場所を確保しなければ。日本にいるときにインターネットでレンタカーやホテル、アパートの仮契約などを済ませておいたのですが、実際に事務所で契約をしてアパートへ行ってみると、入居予定日なのに内装は済んでいない、家具の搬入は遅れる、キッチンのライトはつかない、バスタブの管がつまつて水が流れないと、次から次へと予想外のことがありました。それでも、何とか一つひとつ問題を解決し、いよいよ私たちが最も気についていたSFUSD (San Francisco Unified School District) での娘の

入学手続きをすることになります。

次年度（九月）入学の手続きは前年度の十一月頃より始まるので、本来はその頃より、公立に行くのか私立に行くのかを決定したり、特定の学校を希望したりするのですが、そのためには住所が決まっていなければなりません。私たち夫婦の場合、二人が異なる場所にある大学に受け入れてもらうために、サンフランシスコに住むかオーランドに住むか最後まで決めかねていました。最終的にサンフランシスコに決めてアパートの仮契約ができたのは何と渡米の一か月前でした。それから、アパートに近い学校をインターネットで探し、サンフランシスコの公立学校の入学手続きを統括するSFUSDと連絡を取ろうとしましたが、電子メールでは受け付けてくれず、電話か直接訪れるかで予約を取り、予防接種を受けたり、英語の試験を受けなければならぬということでした。私は直接訪れて予約を取る計画をたてました。

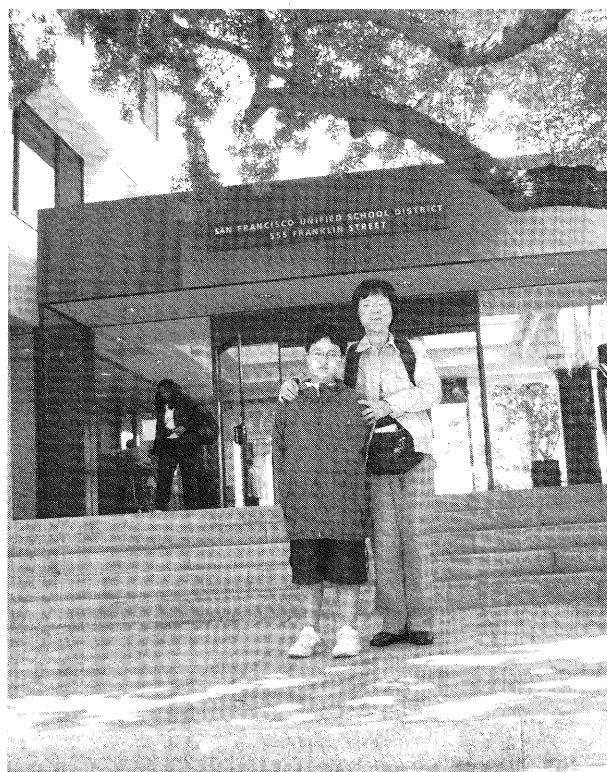
SFUSDの受付で入学手続きの部署を聞き、その待合室に行くと、中国、韓国、メキシコなどから来たと思われる親子でごったがえしていました。「面接をしてもらえますか」と聞くと、「予約がなければ絶対にだめ。今日、予約を取り、また出直して」などとスペイン語なまりの英語でまくしたてられました。ただでさえもざわついている受付で、英会話力の不十分な私が渡米後三日目に内容を全て聞き取るのは至難の技です。「もう少しゆっくりしゃべってくれませんか！」私たちは外国人で三日前にこちらに来たばかりなのです」と言おうとして、ふと回りをみると、何とそこにはみな外国人で、私たちは特別でも何でもなく、「ああ、ここは外国人の集まりなんだ」ということにあらためて気づかされました。異なる文化や社会、言語、思考の人々が出たり入ったりするアメリカという国の教育行政や実践は、日本とは比較にならないほど煩雑なものかもしれない、そのときと思いました。

翌日、予約の時間に行くと、娘はすぐに英語の試験。前日のアルファベットの集中訓練もむなしく、結果はno good。このテストは英語のリスニング、リーディング、ライティングなどの力を約一時間にわたってみるものです。娘によると最初から最後まで英語でいろいろなことを聞かれたり、本を見ながら答えさせたりするもので、さつぱりわからなかつたそうです。

その後、親同伴で面接が行わ

れ、日本での学年、予防接種歴などを聞かれました。小学校の通学証明書や成績証明書については英文書類を用意していきましたが、予防接種歴については現地で書式をもらい、作成するという助言を受けていたので持つていきました。母子手帳を

みながら説明しようとしたが、うまく伝えられないところがありました。結局、娘は翌日、ポリオ、B型肝炎、水痘、ツベルクリン検査の四本の注射を片腕に二本ずつ一度に受けさせられ、私は副作用でショック死しないかと本当に心配しました。そ



▲SFUSD前で、『これから英語の試験です』

の後も、ツ反検査の結果（腕の赤み）が大きすぎるからという理由でレントゲン検査を要求されたり、その結果が異常なしであるのに、それでも結核に罹患している可能性（？）が十パーセントあるから、抗生物質を九か月間飲み続けることを求められたりと問題が生じました。が、それらの問題も何とか解決し、娘は渡米して十日目から地元の公立小学校に通うことになりました。

SFUSDは一八五一年、カリフォルニアで最初に設立された公立の学区で、プレスクールから高校まで一六〇の学校があり、五万八〇〇〇人の子どもたちが学んでいます。この学区はアメリカの他の学区と同様、独自の使命と信念を宣言し、各学校の改革的なプログラムの推進をサポートしています。こちらでは公立学校といつても、各学校の校長先生が親やコミュニティーと連携しながら、いろいろなところから資金を集めてきて、新しいプログラムを作り、先生を雇つたりして、正に学校を創つていく役

割を果たしています。SFUSDでは、新しい言語や文化にうまく適応できるようにニューカマーに対して一年間英語を集中的に学習するELD(a sequential program of English Language Development)によるコアカリキュラムが推進されています。その他、中国語、スペイン語、広東語、日本語と英語のバイリンガル教育を強調するプログラムなどが、それぞれの学校ごとに特色として打ち出されています。といっても、日本語とのバイリンガルを打ち出している学校はサンフランシスコでは小学校二つと中学校一つしかなく、他のほとんどは中国語、スペイン語のバイリンガルプログラムです。人気のあるのはオールタナティブスクールです。これは新しい使命と信念のもとで先生と親を中心新たに設立された学校で、独自のプログラムや人的資源を豊富にもち、質の高い教育をしています。これらの学校には希望者の長いウェイティングリストがあり、希望してもなかなか入れないという

、」とやした。

私は面接官に、アパート近くのオールタナティブスクールであるレイクショアー小学校（Lakeshore Alternative School）へ入りたいという希望を伝えましたが、校の空きがないから入れないと言われ、近くのジョセ・オルティガ小学校

（Jose Ortega Elementary School）への入学が許可されま

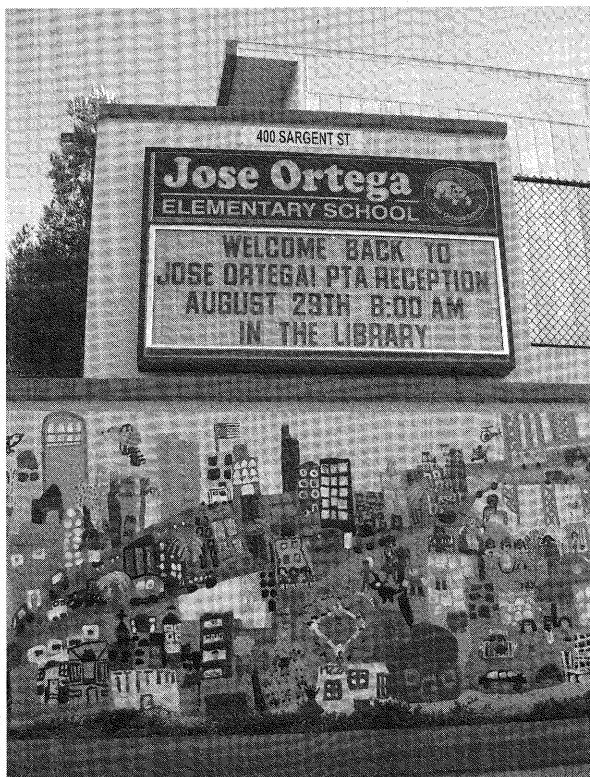
した。この学校は後でわかつたのですが、中国語とのバイリン

ガルプログラムを推進しているところで、学校便りやお知らせなどは必ず英語と中国語で印刷されてい

ました。

ジョセ・オルティガ小学校には日本人の子どもはひとりもいらず、また、日本語のわかる先生もひとり

もいません。登校初日に娘はいきなり英語のシャワーを浴び、一時間目に泣いたそうです。図書室で待機している私が休み時間に娘に会いに行くと、「もうやだ、日本に帰る」「絶対帰る」と目を真つ赤にして涙を両腕でぬぐいながら言いました。無理



▲小学校の入口横にある看板と子どもたちの作品

もありません。子どもたちはどの子も多かれ少なかれ周囲の世界を知りたい、よくわかつた上で生活したいという欲求をもっています。特にその欲求の強い娘がいきなり訳のわからない世界に投げ込まれ、全くの機能不全に陥ってしまったのですから。教頭先生が娘に細やかな配慮をしてくれ、アメリカ人の女児に娘を縄跳びに誘うように、また、いろいろなことを教えてやるようにと助言してくれました。その後、娘はその女児や先生方がとてもよくしてくれること、遊びと給食の時間が少しは楽しいこと、算数と図工と体育では力が發揮できそうなことを直感したらしく、少しずつ慣れていきました。でも、教室では四六時中、注意を集中して周囲の会話を聞きながらも、ほとんどわからない時間を過ごしてくるらしく、帰宅するとそのストレスを発散するかのように機嫌の悪い状態が続きました。私は「学校で随分がんばっているんだね」と心のなかでつぶやきながら、見守ることにしました。

（二か月経った今で）

は、娘曰く、友だちと指すもうをしたり、算数で答えに自信のあるときに挙手をするそうです。きっと、友だちや先生に恵まれているのでしょう。学校への不適応を最も心配していたので、娘が徐々に学校に適応していくてくれたことはとてもありがたいことでした。

娘が地元の小学校に入学したために、私は親としてPTA、給食システム、制服、個人面談、その他数々のイベントなどを経験していくことになります。こういった経験も娘と一緒に来たからこそ得られるものなのですね。

綱渡りの一週間を経て生活や入学手続きが何とかながらも、ほとんどわからない時間を過ごしてくるらしく、帰宅するとそのストレスを発散するかのように機嫌の悪い状態が続きました。私は「学校で随分がんばっているんだね」と心のなかでつぶやきながら、見守ることにしました。